KSKQ(どかどか No.298 ぽぽんがぽん news)第３種郵便物承認 通巻 10717 号 2024 年４月 16 日発行

KSKQ どかどか No.298
ぽぽんがぽん news

笑顔あふれ　つながりあえる社会へ
～ひとりひとりが自分らしく生きてゆけるために～

一九九一年九月三日 第三種郵便物承認 毎月(1・2・3・5・6・8の日)発行

本年１月１日に石川県能登地方において大きな地震が発生し多くの方が犠牲となり、今もなお避難生活を余儀なくされている多くの方々がいらっしゃいます。改めて犠牲になられた方々のご冥福をお祈りいたします。

現地支援に入っていた他法人役員さんを通じて、現地の支援員さん達の「BCPなんて、絵に描いた餅、被災した瞬間に思い出せないし、読み返している時間もない、それよりもまず「動くこと」が最優先だ」という声が聞こえてきました。それほど想定を超える激甚災害となっていることを強く感じました。本通信では、そこで思い出されたこと、考えたことなどを少し書きたいと思います。

東日本大震災後に受講した研修で、激甚災害のときはマニュアルに書かれている「正解」が通用しないことのほうが多く、そんなとき大切になるのは議論を重ねつつ暫定的に納得する結論としての「成解」なのだということでした。その場を共有する皆で「成解」を導き出そうとする過程が、その場を共有するすべての人の力の源泉となるものを生み出すのではないだろうか、と言われていました。

この考えが支援においても通じるものであることを、以前にぽぽんがぽんでもコンサルテーションをいただいた現兵庫県立大学の竹端寛准教授が書かれていた文章を紹介します。

「正解」と対置した「成解」概念。ローカルな文脈という空間限定・依存的で、かつその時に求められるという時間限定的な制約を持つ。だが、その中で「当面成立可能で受容可能」で、その現場を変えうる力を持つ「解」としての「成解」。福祉現場で求められる知は、この意味での「成解」ばかりである。教科書的知識や専門職の思い込み・押しつけを外在的に押し付けた「正解」では、現場が大混乱する可能性は高いが、そのメガネですっきり課題が解決する可能性は、まずない。それほど、対人直接支援の課題は、文脈依存的なのである。

対人支援においても災害BCPにおいても、マニュアル作成だけにとどまることなく、「成解」を導き出す力を養うためのシミュレーションや対話の機会が大切になっていくと考えています。
年々事業としての規制や基準が厳しくなっていく中で、いかに職員や当事者との対話の時間と質を確保していけるかが重要になっていくと考えています。（事務局長　水野昌和）

内容

- 成解
- きょうのNANIKA
- 考える会シンポジウム
- なんでそんなん大賞Ｗ受賞！！
- ぽぽんがぽんエッセイ
- ろくちゃんまちをゆく
- スタッフ紹介／寄付金等のお礼
- 編集後記

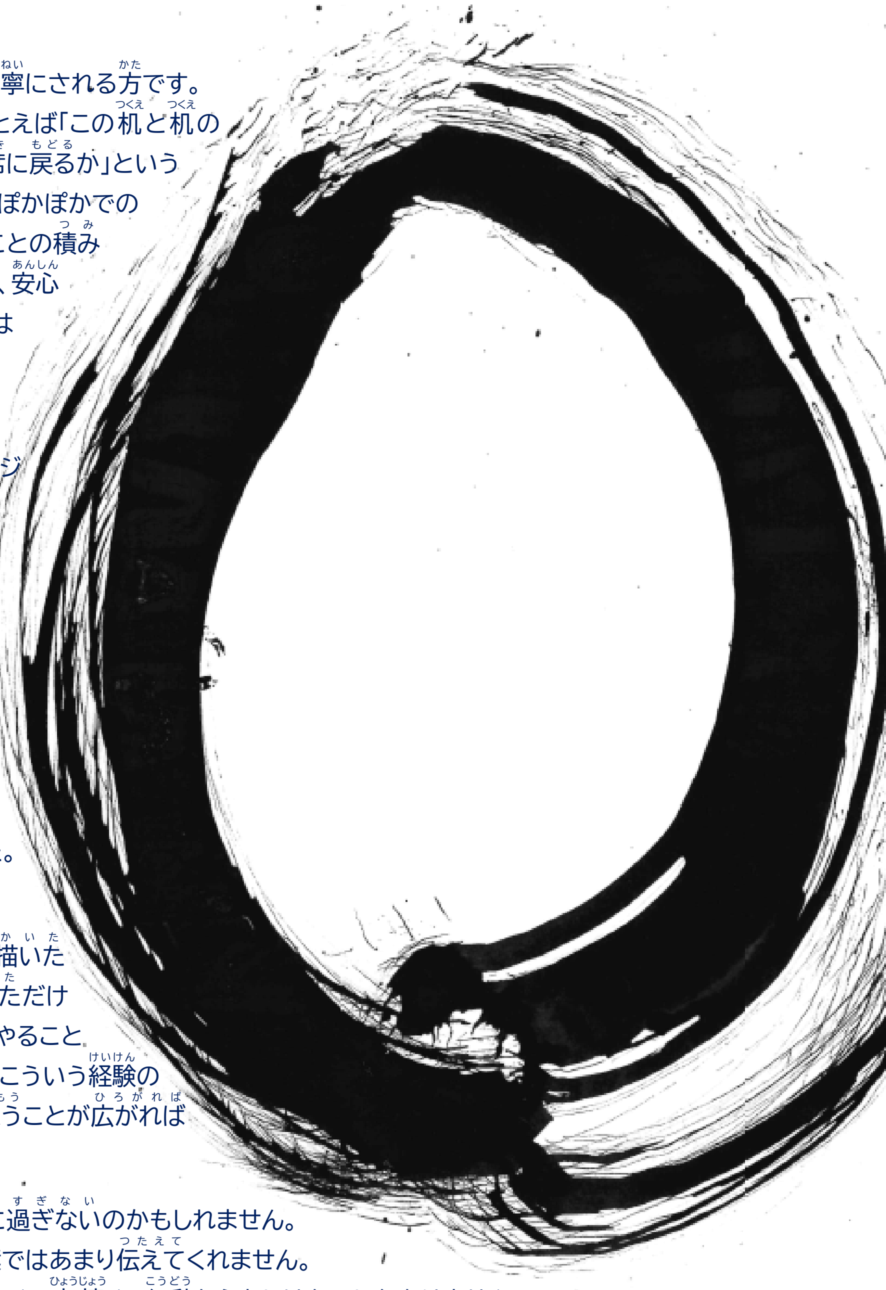
いっしょに考える。
いっしょに行う。

KSKQ(どかどか No.298 ぽぽんがぽん news)第３種郵便物承認 通巻 10717 号 2024 年 4 月 16 日発行

きょうのNANIKA

014

生活介護事業所ぽかぽか・どかどかに通う利用者さんの取り組みのなかで、
私たち支援スタッフや、利用者さん同士が「何かすごい」「何か良いなぁ…」と感じた「何か」。
名前をつけたり説明してしまう前に、まず色んな人に見て欲しい、
そして一緒に考えられたら良いなと思います。



高原さんは、ひとつひとつの行動をとても丁寧にされる方です。また、色んな事にとても気を配っていて、たとえば「この机と机の間を通った人が、次にどこを通ってもとの席に戻るか」ということもしっかり見ておられます。高原さんのぽかぽかでの過ごしは、こういう、ひとつひとつの細かなことの積み重ねのように見えます。高原さんのペースや、安心できる流れのようなものがあって、スタッフはそれをできるだけ把握しながら関わりをしています。

ぽかぽかの商品「アクリルたわし」のパッケージ変更を検討するなかで、アクリルたわしの形に合ったデザインのもの…あ、何種類か「○」を描いてもらったらいいかもしれないと考え、そうだ、今年の書き初めで良い表情をしていた(ように見えた)高原さんにお願いしてみたい、と思いました。

この紙に、○を描いてくれませんか、とお願いして道具を見てもらうと、「描く」と言われて6枚の「○」を描いてくださいました。

この「○」、なんというか、自分には描けない、すごい「○」です。でも、高原さんが自発的に描いたものではありません。お願いされたから描いただけです。やっぱり本人自ら「やりたい」と思ってやることでないといけないんじゃないか？いやいや、こういう経験のなかから、高原さんが自分で「やりたい」と思うことが広がればいいのでは？

広がればいいというのは、支援者の価値観に過ぎないのかもしれません。
高原さんは、自分の気持ちを「こうだ」と言葉ではあまり伝えてくれません。
高原さんの気持ちは、高原さんのリアクションや、表情や、行動からおしはかるしかありません。

ぽかぽかでの高原さんとの関わりには、ためらいや、葛藤がつきまといます。答えが出せません。
でも、考え続けながら関わっていくことに、何か意味があるのかもしれない、と思っています。

（題字：林裕之さん　文：山根康純）

いっしょに考える。
いっしょに行う。

2023年度 知的障害のある人の自立生活を考える会 オンラインシンポジウムにパネラーとして参加しました。

映画「道草」との出会い

2019年道草の上映をきっかけに、ぽぽんがぽんがこれまで地道に取り組んできた、知的障がい者の自立生活支援にスポットがあたることになった。

・道草の記事が読売新聞に掲載された際、ぽぽんがぽんの自立生活取り組みが紹介される。

・大阪での上映時、舞台挨拶に自立生活をしている奥原さえ子さんとその仲間（ヘルパー）たち登壇

・NHK Eテレ「バリバラ」にも取り上げられ奥原さんとスタジオ出演

・東京家政大学教授田中恵美子さんからインタビュー（ぽぽんがぽんの知的自立取り組みについて冊子に掲載される。）

・ぽぽんがぽんの相談支援も企画に関わり、茨木市障害者地域自立支援協議会で道草の上映、上映後には早稲田大学教授岡部耕典さんの講演、トークショーにはぽぽんがぽん田井英一郎もグッドライフの末永さんたちと登壇

・2020年2月2日ぽぽんがぽんでも道草上映会を開催（確かコロナ拡大前でぎりぎり開催できた記憶あり。）

「知的障害者の自立生活に関する声明文プロジェクト」との出会い

このような経緯から 2019年12月21日に開催された「地域で暮らす」を知る、考える、広げる～重度知的障害者と呼ばれる人たちと仲間の実践から～にパネラーとして声をかけていただき、声明文プロジェクトのみなさんとつながることになった。（ぼくの登壇したパネルディスカッションの前段には、映画「道草」上映＆トーク 対談：宍戸大祐（映画「道草」監督）×立岩真也（立命館大学教授）という貴重な会であった。）

「知的障害のある人の自立生活について考える会」への参画

その後、社会はコロナ禍に入り、オンラインでの集まりが主となるなか、「声明文プロジェクト」が発展して「知的障害のある人の自立生活について考える会」となり、ぼくも運営委員に加わることとなった。

オンラインサロンやオンラインシンポジウムの定期開催、フェイスブックグループの取り組みを継続して取り組んできている。

さて、前置きが長くなったが、ここからが本題となる。

2024年２月23日「知的障害のある人の自立生活について考える会」2023年度オンラインシンポジウムにパネラーとして参加させていただいた。

オンライン配信ではあるが、登壇者や運営委員は、東京麻布十番のスタジオに集合することになり終了後作戦会議をすることになった。

東京に行くときはいつも誰かがガイドをしてくれていたぼくにとっては、まず一人で東京に行って１泊して帰ってくることが大仕事であったのだが、その話は置いておく。

詳細は後日配信されるだろうYouTubeを見てほしいが、ここでは当日のぼくの発言を一部掲載したい。

「今日は自立生活という話ですが、グループホームとどう違うのかという話だが、イメージをしてほしい。

健常者といわれる人たち、自分がグループホームに入るイメージをしてほしい。

例えば、4人のグループホーム、4人の職場の同僚や友達、まったく見知らぬ人4人が突然集められて１つの所に住むのです。

これは実際住んだらそこには、人間関係の編み目ができて、仲良くなったり、良い人間関係ができることもある。

そこには、入居者同士の関係がかけがえのない貴重なつながりができることもある。

多くの人はそういう場面をみて、グループホームは知的障害の人にとって良いところだ、本当に知的障害の人は一人暮らしがしたいのかと言われます。

一方で、グループホームで気が合わない人もいたりする、その場合、そこから出て行けない。

そこにずっと関係が良くても悪くてもいなくてはいけなくて、選択ができない。

そこで重度訪問介護が使えれば、そこに住みたくなければ、そこから出て行ける。

重度訪問介護を一人暮らしの制度と考える必要はない。

重度訪問介護を使って自分の住みたい人と住むこともできます。

その人一人ひとりが決めて、自分の生活を決めるためには、最低限、重度訪問介護の制度が必要だ。

なぜ自立生活なのかということを共有したいと思う。」

今回のオンラインシンポジウムを契機に、全国で、大阪で、茨木市で知的障害のある人の自立生活をひろげるために、もっと頑張りたいと思う。

（太田吾郎）

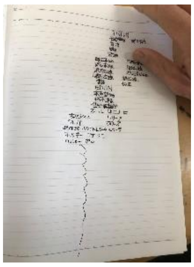
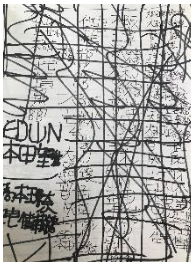
第4回なんでそんなん大賞 W受賞！！

【審査員賞】◆柳沢秀行賞（大原美術館学芸統括）

掲載サイトはこちら

タイトル｜連絡帳Contact book

行為者｜Ta さん　Actor｜Mr.Ta
発見者｜山根（支援者）　Finder｜Yamane (Supporter)

Ta さんは平日の日中を生活介護事業所に通い、夜はグループホームに帰る。生活介護とグループホームのスタッフ間でやりとりする「連絡帳」。
ある時から、Ta さんが空白のページに色々な文字を書きこむようになった。日付がついているので、その日の記録、あるいは連絡なのかもしれない。書き終えるとスタッフに見せ、「できた」「じょうず」と言って、スタッフも「じょうず」と返す。それから自分のリュックにしまう。

大和路線 大阪環状線／普通 快速／EDWIN／本田望結／橋本環奈／住宅情報館

最初はこれが定型だったけど、日を追うごとに語句が増えていく。文字は踊り始め、効果的に線が加えられる。このままエスカレートしていくのかなと思ったら、ページの余白を活かして配置される時期が挟まれる。書道でも「余白」が大事というし、華道の「引き算の美学」にも通じるのかもしれない。そして、ページが文字と線で埋め尽くされる時期がくる。ボールペンに加えてマジックペンが使われ、独特のルールで重ねられていく。そして、真っ黒の「連絡帳」が完成した。
…
これは Ta さんのプライベートな創作物でしょう、webサイトにアップするなんて、Ta さんは望んでいないんじゃないの？
確かに、投稿の許可をもらってはいても、Ta さんの本当のところはわからない。僕は、Ta さんについて投稿することを、自分で正当化できない。それでも、
「自分は行の途中から大胆に文字を書くなんてできないな」
「関西本線を 4行にわたって書くのってどういうことやろう」
「この表紙のテクスチャーはすごい」
言葉少なな Ta さんの、大切な表現、個性に対する驚き／感動をどうしたらいいんやろう。それを、コンプライアンスの中で平準化してしまうことが、どうしてももったいないような気がする。
葛藤するならやめておいた方がいいんじゃないか。その方が無難じゃないか。
でもなぁ…
連絡帳を、その目的から逸脱して真っ黒にしてしまう行為。これをポジティブに捉えることが、Ta さんの生きやすさにつながるなら、自分は葛藤していても他の人と共有したい。
そんなこと、Ta さんは多分どこ吹く風で次の創作に取り掛かっているけど…

いっしょに考える。
いっしょに行う。

【審査員賞】◆菅原直樹賞（劇作家、演出家、俳優）

タイトル｜ちゃんと GPT｜Chant GPT

行為者｜Y くん　Actor｜Y-kun
発見者｜みずの　Finder｜Mizuno

掲載サイトはこちら

久しぶりの Y くんとのガイドヘルプ。以前担当してたのは彼が 3年生か 4年生のころ。
今は 20代半ば?くらいになり、僕よりも大きくなっていることに驚きつつも、どんな風に余暇を過ごすのか楽しみでもあった。 16:00～18:00 夏の酷暑の中、ひたすら散歩。万歩越え。
運動不足の 46歳となった私にはきつい・・・。今回は道中での彼との会話から。

Yくん「サンタは青と白」
私　「いや、赤と白」
Yくん「サンタは黄色と白」
私　「いや、赤と白」
Yくん「サンタは黄緑と白」
私　「いや、色混ぜてもダメ。赤と白」
Yくん「サンタはピンクと白」
私　「おしいね。赤と白混ぜるとピンクやけど。」
Yくん「サンタは紺色と白」
私　「いや、遠のいたよ。赤と白」
Yくん「サンタは黒」
私　「黒づくめのサンタはいませーん。」
Yくん「ブーツ」
私　「あ・・・ブーツは黒やね」
Yくん「サンタは黒」
私　「サンタのブーツは黒やね。正解」
Yくん「やった。」
Yくん「青色と白」
私　「ぶーっ。赤と白。」・・・続

Yくん「こいし園(甲子園)」
私　「いや、小石の上では打てません。」
Yくん「こいし園」
私　「いや、小さすぎて外野守れません」
Yくん「こいし園」
私　「そもそも 9人乗れませんし」
Yくん「ゲラゲラ こいし園」・・・続

Yくん「サンタのおばさんが～♪」
私　「いや、おじさんです」
Yくん「サンタのおばさんが～♪」
私　「残念、おじさんなんです」
Yくん「ば」
私　「じ」
Yくん「『は』にてんてん」
私　「『し』にてんてん」
Yくん「(宙に指で『ば』と書く)」チラッと私を横目で見る
私　「(宙に指で『じ』と書く)」・・・続

Yくん「シンタクロース」
私　「サですね」
Yくん「シンタクロース」
私　「サンタクロースです」
私　「サの練習しましょう。『さんぽ』の『さ』」
Yくん「さしみ」「さくら」「さみしい」
Yくん「サイクリング」
Yくん「笹かま」
Yくん「おいしいですね。いい歯ごたえです。」
私　「赤色と白色の服着てるおじさんは?」
Yくん「サンタクロース」
私　「正解。『さ』攻略ですね」
Yくん「やったー。」
Yくん「シンタクロース」
私　「サでしたねー」・・・続

Yくん「おでん」
私　「?! おでん・・・? 遺伝?都電?おとん?どこ誤字?」
Yくん「おでん」
私　「・・・・??」　「・・・?!あっ!影か!」
Yくん「あつあつ美味しそうですね～」・・・続

会話は途切れることなく 2時間の散歩。返答の引き出しを試されているような、誘導されているような・・・
汗びっしょり、足パンッパンッでしたが彼の成長を感じ、会っていなかった時間を想像し彼の世界をいっしょに並走している心地よい時間でした。

なんでそんなん大賞って？？？
＞岡山県にある「ぬか　つくるとこ」という生活介護事業所が取り組まれている「なんでそんなんプロジェクト」という取り組みがあります。人の行為から生まれる「よくわからないこと」に対して真摯に向き合い楽しむための方法を探るプロジェクトです。今回、法人から山根と水野が投稿した作品？が多くの応募作品の中から審査員賞を W 受賞いたしましたので、ご報告させていただきます。プロジェクト詳細は右の QR コードよりご覧ください。賛否あるかもしれませんが、措置から契約へと時代が移り、法や事業が整備されながら、仕方ない、とボヤキながらいつのまにか深まる線引きと制約の向こうに忘れかけている関係性をなんだか懐かしくも思い出す感覚がありました。今回はご紹介を兼ねて通信にて報告させていただきました。（文　水野）

なんでそんなんプロジェクト

いっしょに考える。
いっしょに行う。

KSKQ(どかどか No.298 ぽぽんがぽん news)第３種郵便物承認 通巻 10717 号 2024 年４月 16 日発行

＜ぽぽんがぽんエッセイ＞

「姉の事」

私事ですが、一昨年、姉が四十七歳で亡くなりました。

十二指腸の悪性腫瘍で、かなり進行が進んでおり、またコロナ禍という事もあって、治療もままならないまま一昨年の七月に永眠しました。

姉に対して、まだ若いのにという思いや、もう少し早く検査ができていたら、という後悔は当然あるのですが、一方で姉は、自分の人生を生き切ったのだとも思いました。

もちろん最初はそんな風には思えなかったのですが、葬儀を一通り終え、姉の部屋を片付けていた際、様々な資料や記録を見つけ、姉が辿った足跡を知る中で少しずつそのような考えに至りました。

姉は大阪市内の特許事務所に勤めており、翻訳関係の仕事に携わる傍ら、ボランティアで留学生を対象に日本語の家庭教師や通訳も行っていました。

家庭教師の生徒から何通も手紙が届いていて、姉が彼らの就職面接等の相談にも親身に乗っていた様子も伺えました。

職場はそれほど大きくなく仕事も忙しいという話は生前姉から聞いていたので、休みの日にボランティア活動に時間を割くのは大変だったと思います。ですが、自分がやりたい事、正しいと思うことのために活動していたことは、彼女にとって自分の人生を生きるという意味そのものだったのだと感じました。

もちろん四十代の若さで亡くなる事は姉にとって本位ではなかったと思いますし、成し遂げたい夢や叶えたい理想は他にもたくさんあったのだと思います。

そういった意味では病気により思い通りにならなかった事も多く、後悔もあったかもしれません。にもかかわらず、姉が生きた意味はあったのだと理解しています。

困っている人のために何かをやりたい、力になりたいという思いは、理屈ではなく昔から姉がずっと持っていた資質のようなものでした。

そのために活動する事で自分に無理を強いていた面も少なからずあったとは思いますが、自身の資質に従い、正しいと信じる事を続け、結果として周りの人たちの支えになった事は、彼女の人生において大きな達成の一つだと思っています。

生きている間、何かを十全に成し遂げられなかったとしても、道半ばであったとしても、本質的にそれはあまり重要ではない。大事なのは自分の人生を生き切る事であり、その意味で姉は確かに自分の人生を全うしたのだと、そう思っています。

翻って、自分が仕事に携わっている時にも、同じ事を感じる事があります。

利用者の方は、行きたい場所に出かけられたり、やりたい事ができた時、心から嬉しそうな表情をされるのですが、その姿を間近で見るたびに思います。

障がいの有無や社会的な影響力に関わらず、その人がその人らしく生きる中にこそ人生の喜びや幸せがあるのだと。

そしてまた、自分たちが支援者である限り、その人の小さな喜びや気づきに寄り添う事を、何よりも大切にしたいと思っています。（田井英一郎）

KSKQ(どかどか No.298 ぽぽんがぽん news)第３種郵便物承認 通巻10717号 2024年４月16日発行

ろくちゃんまちをゆく NO.105

こんにちは、2023年7月号で、2022年5月に実施したトヨタ自動車の車両であるJapanタクシーの検証会についての記事を掲載させてもらいました。その後、2023年１２月にJapanタクシーと異なる車両で、シエンタ、ヴォクシーとJapanタクシーの車両比較とその後にトヨタ自動車との意見交換会を実施しました。参加者は、近畿分科会の委員、当事者、学識、トヨタ自動車株式会社、行政職員を合わせると48名となります。

車両の特徴として、シエンタ、ヴォクシーは、後方からスロープ板が出てきて、車椅子で乗車できます。また、シエンタは乗用車タイプでヴォクシーはワゴンボックス型で大きいタイプです。Japanタクシーは横から、スロープ板を設置して車椅子で乗車ができます。

シエンタ

ヴォクシー

乗車しての感想は、シエンタ、ヴォクシーはスロープ板が、そのままでてくるので、設置の手間がなく車内へスムーズにいけて、方向転回がしなくて快適です。さらにヴォクシーは車内が広めなので、車窓からの景色は良く見えます。シエンタの場合は車内が広くないため、私の電動車椅子ではギリギリでした。Japanタクシーは、横からスロープ設置して、車内で方向転回しますが、私の電動車椅子は、大きいために方向転回ができませんでした。

課題としては、シエンタ、ヴォクシーについて、スロープの耐荷重が介助者込みで 200kgまでとなっており、車椅子でリクライニングなど装備品を合わせると 200kg こえてしまい、せめて 300kgまで耐久力のあるスロープがあればと思いました。Japanタクシーについては、車椅子で車内での方向転回がしやすくなればと思いました。タクシー協会さんが参加され、Japanタクシーでスロープ板の取り付け方に時間がかかり、簡略できればという意見がありました。トヨタ自動車には、車両の検証会や意見交換会を踏まえて、車両のリニューアルの時に改善してもらえればと思いました。その為には、引き続き意見交換会などを踏まえて取り組んでいきたいです。（六條友聡）

ジャパンタクシー

いっしょに考える。
いっしょに行う。

スタッフ紹介
ヘルパー派遣部門

こんにちは。ヘルパー派遣部門の水上有加です。わたしは、学生時代にぽぽんがぽんと出会い、11年程が経ちました。

ぽぽんがぽんでは、利用者の方と色々なところにお出かけしたり、居宅での支援をしたりと、日々様々な発見等もあり、いろんなことを経験させていただいています。

コロナも完全にとは言いませんが、少しずつ色んな方がお出かけを再開しはじめているのを身近に感じ、楽しそうな表情をみることに嬉しさを感じています。気を付けつつではありますが、みなさんと一緒にお出かけできるのを楽しみにしています。

また、プライベートでは基本的にはインドアで、アニメやゲームを観ることが多いのですが、季節ごとの景色（花など）を見に行くことや、音楽が好きでライブやフェスに行くのが好きです。ライブでは、時々遠征もして、その土地の美味しい食べ物を食べることも楽しみの一つになっています。

仕事もプライベートも楽しみつつ、頑張っていきたいと思うので、これからもよろしくお願いいたします。

ご支援、ご寄付、ご提供ありがとうございます！

2023年12月8日～2024年2月20日まで（順不同）

郵便振替の都合上、お名前が反映できていない場合は上記期間に限らず掲載させていただきます。ご了承ください。

社会福祉法人ぽぽんがぽんへご寄付ありがとうございました

新井様　金田様　長島様　岸本様　原田様　匿名の皆様

つながりの会ぽぽんがぽん（後援会）へのご寄付ありがとうございました

萩原様　匿名の皆様

【募金箱】　髙原様　坂本様　白石様　埴渕様　村上様

たかだ歯科様　シャルドン様　ﾌｧﾐﾘｰﾏｰﾄ舟木町店様　ﾌｧﾐﾘｰﾏｰﾄ並木町店様

ﾌｧﾐﾘｰﾏｰﾄ天王店様　ﾌｧﾐﾘｰﾏｰﾄ別院町店様　王将阪急茨木店様

アルミ缶・牛乳パックのご提供ありがとうございました

【アルミ缶】ハロハロ様　舟橋様　淺野様　古川様　埴渕様　ハシオダニ様　藤本様　竹内様　林様　GHピース様　作業所等へ持って来てくださった皆様

【牛乳パック】萬谷様　ハシオダニ様　洗様　関西よつ葉連絡会淀川産地直送センター様　GHピース様　GH多歌多架様　作業所等へ持って来て下さった皆様

ご寄付をご希望いただける方は
こちらまでお願いします

<払込取扱票をご利用される場合>

口座記号番号：00930-0-212299

口座名称：社会福祉法人ぽぽんがぽん

<口座振込をご利用される場合>

銀行名：ゆうちょ銀行

金融機関ｺｰﾄﾞ：9900　店番：099

店名：〇九九（ｾﾞﾛｷｭｳｷｭｳ）

預金種目：当座

口座番号：0212299

口座名称

（漢字）：社会福祉法人ぽぽんがぽん

（カナ）：フク）ポポンガポン

いっしょに考える。
いっしょに行う。

編集後記

2024年度がはじまる。2023年3月、新年度に向けてやり残した宿題に取り組みつつこれを書いている。
私たち障害福祉サービス事業を実施する事業者は、国の報酬改定によって大きな影響を受けるため、その情報等に注目するのだが、そのなかに「強度行動障害を有する障害者への支援体制の充実」とある。
「強度行動障害」という言葉は好きではないが、考えてみれば、ぽぽんがぽんではこれまで「強度行動障害を有する障害者」の支援を多く担ってきているところではある。

知的障害のある人の重度訪問介護を使った自立生活などはまさにそのものである。
が、どうも国の制度設計の文脈にはそこが抜け落ちているのではないか。なぜか？
ぽぽんがぽんのような重度訪問介護を使った自立生活の実践をしている団体が国の政策検討の場に入っていないからではないか。
このことをしっかり反省しなければと思う。

巻頭の水野さんの取り上げた竹端先生の難解な文章から引用して今後私たちに(ぼくにか？)何が必要かを言ってみるとしよう。
私たちは「成解」を探求するという、これまで自分たちが実践してきた又していることを自覚すること。一方で「教科書的知識や専門職」的知識という「正解」を知識として持ちそれを語る力を持つこと。そのうえで、「正解」を踏まえ「成解」を説き、広く伝える力を持つこと。(ぼくの伝える力が不足していて何を書いてるかよくわからないと思います。)
こんな思いも込めて2024年度は行動援護従事者養成研修を実施予定です！　(太田吾郎)

● 法人本部、ヘルパー派遣、グループホーム窓口、相談支援
〒567-0888 茨木市駅前1-4-14-3F　Fax 共通 072-623-9203
法人本部　Tel 072-623-9202 (9:00~18:00)
グループホーム窓口　Tel 072-623-9202 (9:00~18:00)
ヘルパー派遣　Tel 072-623-9205 (9:00~18:00)
相談支援　Tel 072-623-9210 (9:00~17:00)
● いばらき自立支援センター「ぽかぽか」(8:30~17:30)
〒567-0850 茨木市真砂玉島台8-20　Tel 072-635-5762　Fax 072-635-5763
● いばらき自立支援センター「どかどか」(8:30~17:30)
〒567-0842 茨木市五十鈴町7-29-1FS　Tel 072-637-6882　Fax 072-637-6883
● 茨木市子ども・若者自立支援センターくろす (10:00~19:00)
〒567-0842 茨木市片桐町4-7　Tel 080-2467-5566
● ユースプラザ center エント (10:00~19:00)
〒567-0882 大阪府茨木市元町4-7 ローズ WAM2階 事務室　Tel 080-1521-4624

https://popongapon.com/

編集人:「障害者」の生活をひろげる場「どかどか」(社会福祉法人ぽぽんがぽん)
TEL(072)623−9202(お問い合せはこちらまで)
〒567-0888 茨木市駅前1-4-14-3F
発行人:関西障害者定期刊行物協会
〒543-0015 大阪市天王寺区真田山町2-2-東興ビル4F　定価:50円

UD FONT
見やすいユニバーサルデザインフォントを採用しています。

一九九一年九月三日 第三種郵便物承認 毎月(1・2・3・5・6・8の日)発行

いっしょに考える。
いっしょに行う。